

DOLL FORUM JAPAN

人形制作・後藤朝子

Asako GOTO

撮影 石黒健治



DOLL FORUM JAPAN

ドール・フォーラム・ジャパン

ドールフォーラム特別号

MAY 1995 Vol.5

展覧会

写真上：若月まり子（世界の人形展）

下左：中村みどり・安藤早苗二人展 右：ゆすら人形展



展覧会名	会期	会場
日本経済新聞社主催 「人形芸術の世界展」 夢二から現代へ	5/11-23 6/29-7/5 7/20-8/6	大阪・なんば高島屋 東京・銀座松坂屋 名古屋・松坂屋美術館 堀柳女、平田郷陽から 四谷シモン、与勇輝まで 37人 120余点
「世界の人形展」 -若月まり子 妖精の世界-	6/25 7/1	東京 日本橋丸善4F 10am-19pm 最終日17pmまで 同時開催 ティ・ベア・フェア ☎03-3691-3572
ゆすら人形展 -丘の上まで 会いに来て-	5/17 5/28	岩崎ミュージアム（横浜） 9:40-17:30（最終17pmまで） 横浜市中区山手町254 ☎045-623-2111 入館¥300
中村みどり・ 安藤早苗二人展	5/21~ 5/30	左頁「せ・ら〜る」欄 参照
山口景子人形展 「遠い国、 遠い人々」	5/27 6/4 8/10 8/15	メノワ（有明コロシアム 本館1F） 11:00-18:00 東京都港区虎ノ門2-10-4 ☎03-3582-0111 大丸・四条烏丸（京都） 5階アートサロン 10:00-19:00（最終日17:00） ☎075-211-8111

CONTENTS

	page
【表紙】 人形制作・後藤朝子 撮影・石黒健治	
【スケジュール・インフォメーション】	2, 3
【近況報告】 中西京子 杉田明利	4 5
【ゲイルからの手紙】 ゲイル・エニド・ジマー 第3回 「トイ・フェア体験」	6, 7
【レビュー】（団体）	8, 9
【カバーインタビュー 後藤朝子】	10, 11, 12, 13
【人形つれづれ 第5回】 福島弘太郎	14
【レビュー】（個人・グループ）	15
【FROM OVERSEAS アンヌ・ミトラニ】 永田千奈	16, 17
【ピンスポット／ラ・ファミーユ】	18
【おけけ屋敷店長日記】 魔宮ピノン	18
【LETTERS／編集後記】	19

DOLL FORUM SPECIAL ISSUE

by courtesy of Diane Hargreaves
in Australia

doll made by E.L.Taylor photographed by Colin Willoughby	24
【The Incomparable Artistry of E.J.Taylor】 text by Diane Hargreaves	23
【Maxine Morganson - A New Discovery】 text by Diane Hargreaves	22
'Elves', 'Christmas Elves' - E.J.Taylor	21
'My father as the family bulldog'	20
'Appearing One Night Only' - Maxene Morganson	

ドール・フォーラム・ジャパン

1995年5月19日

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは、日本のアーティスト・ドールを支援するためにつくられた情報誌「ドール・フォーラム・ジャパン」の購読会員による非営利の組織で、購読会費とユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

SCHEDULE INFORMATION

	住所・開館時間	5月／	6月／	7月／	8月
横浜人形の家 (企画展示室)	〒231 横浜市中区山下町18 ☎045-671-9361 10:00-17:00 月曜日		6/3 - 6/26 新着人形展	7/16 - 8/15 夏期特別展	
新宿せ・ら〜る (人形展示のみ掲載)	〒160 新宿区歌舞伎町1-30-1 新宿PEPE 6F ☎03-3205-2673 10:30-20:00 年中無休	5/21-5/30 中村みどり・安藤早苗 二人展	6/11 - 6/20 ホリヒロシの 人形教室展		

昔人形青山 ギャラリーK1 (アピール・ボックス)	〒603 京都市北区室町通 北大路下ル小山東大野町69 ☎075-415-1477 PM 1 - 7	5月1日〜7月31日 土井陽子(神奈川) 長谷川彩美(兵庫)・松田珠江(東京)
---------------------------------	--	---

人形玩具学会 第7回大会 公開行事 6月17日(土) 13:00~17:00 大会テーマ「人形とはなに」 ◆ 基調講演: 北村哲郎 ◆ 人形作家に聞く: 市橋とし子 伊東久重、川本喜八郎 ◆ 自由討論 6月18日(日) ◆ 研究発表 10:30~12:30 ◆ シンポジウム 13:30-16:30 「人形の国のアーティスト」 パネリスト: 四谷シモン、芹川英子 後藤朝子、渡辺純子、関原紫光他 司会: 増渕宗一、小川千恵子 【会場: 横浜人形の家あかいくつ劇場】 ☎045-671-9361 横浜市中区山下町18 参加費: 一般3300円(二日間有効) *お問合せ・申込はDFJ事務局でも受けつけます 関連展示: 「人形の国のアーティスト」 6月14日~6月18日 横浜人形の家多目的室& メルルク ギャラリー	木曾駒ドールアート ミュージアム 日本で初めて、アーティスト・ドールの展示を専門に目指すミュージアムが木曾福島町に、この夏オープンします。 ☆オープン 8月1日 (7月31日 オープンセレブション) ☆常設展示「中西京子人形作品展」 ☆オープニング記念特別展示 「現代ドールアーティストによる作品展」 (出展予定作家: 高橋操、藤井路以、三輪輝子、小林美枝子、黒沢正子) 【木曾駒ドールミュージアム】 長野県木曾郡木曾福島町新開130番地 *お問合せはDFJ事務局でも受けつけます	昔人形コレクション 東京展 7月14日(金)~16日(日) 午前10時~午後7時 東京都港区芝 増上寺 平田郷陽作の市松人形他、百余体の昔人形に加え、アピールボックスin Tokyo として岡馬勲、山本七生、山吉由利子の創作人形も展示。 ☆「人形とワインの夕べ」 同会場にて7月15日(土) 午後6時30分~9時 参加自由 軽飲会の用意あり 連絡先: 上記「昔人形青山」欄参照
パフォース通信 DFJ1号で紹介した児玉幸治さんにより、「パフォース通信・創作人形の広場」が、商用パソコン通信ネット「People」において開設されました。創作人形の作り手と鑑賞者の交流・情報交換を試みます。「People」についての問合せ・入会希望は: 株式会社ビーブル 〒106 港区六本木4-4-5 第30興和ビル8F TEL 03-5561-4130 FAX 03-5561-4131	DFJワークショップ 「和紙による表面処理」 講師に岩切克樹氏を迎え岩切夫妻の開拓した和紙による表面処理の技術を修得します 期日: 6月25日10:00 ~ 16:00 会場: 岩切人形教室(東京都世田谷区) 定員: 15名 会費: DFJ 会員8千円 非会員1万円 (材料費+お茶菓子込/昼食含まず) 申込方法: 葉書にてご予約下さい あて先: DFJ事務局(住所19頁)まで *申込が10名を満たない場合は中止致します	DFJ主催 GDS コンベンション参加ツアー 今年のGDS(グローバル・ドール・ソサエティ・本部イリス)のコンベンションに参加する方を募ります。今回数名の作家の方が参加する予定です。 期間: 10月3日~10月12日(予定) 行程: 成田→ロンドン→ストランドフォード→ロンドン(コンベンション: 10/5~10/8)→ロンドン→成田 参加費: 約30万円(宿泊含) 募集人員: 15名(10名を満たない場合は中止致します) 問合せ: DFJ
転居・移転 【転居】◆岩切克樹・映幹子 〒880 宮崎市月見ヶ丘5-20-3 ◆田端愛子 〒213 川崎市高津区二子583-8 【移転】◆岩切人形教室(6月より) 東京都世田谷区上用賀5-27-20 田村方 ☎03-3425-2396	出版 山口景子作品集 「遠い国 ・遠い人々」 5・27発行 ¥5800 777ト 出版 075-241-2709	ポストカード 松浦佳代子 ポストカード7枚セット (写真右) ¥1000 送料別 申込: 広島県三 原市沼田西町松 江187-30 松浦



去る2月に銀座ミキモトで展覧会を開催。

6月6日から11日まで高松三越特設会場で
作品展「金比羅歌舞伎の華」を開催。

この8月にオープンされる木曾駒ドールアート
ミュージアムでは中西さんの作品が常設展示さ
れる。

シルクロード
(和紙 25~45cm)

中西京子 近況報告

近況報告 杉田明利

4月に個展を開催。

従来の粘土による作品に加え、

木彫胡粉彩色による新作を発表した。

トルコから出版された日本民話の本の

挿画を担当した。

次回展示は来年の予定。



七五三 (石塑 46cm)



子とろ (石塑 21cm)

日本の民話の世界を独自の解釈で表現する。
「子とろ」は子どもの遊びだが、ここでは
鬼に対する地獄の亡者のせめぎあい表現されている。



ブリジッド・デュバル

エドナ・パリ



ゲイルからの手紙

第3回 トイ・フェア体験

ゲイル・エニド・ジマー

今まで何回、アメリカ国際トイ・フェアを取材するために雪のニューヨークの町をとぼとぼ歩いていったらう？（でも、今年は暖冬だったのでコートはいらなかったの、ラッキー！）

取材記者として私は、今まで毎年報道関係者のミーティングでお茶とかジュースなどをすすりながらフェアの概要や統計を聞き、無料の目録をもらって会場に通っていた。だけど、この目録というものが大して役に立たないのに、会場であるこの広大なジャビッツ・センターを一日中歩き回るにはかきばる。今年は専門誌のインデックス四ページ分を綴ってブース番号がすぐ分かるようにしておいたの、身軽になることができた。そして開催前日には入場の登録をすませておいた。

展示者は、目録に会社のアルファベット順に掲載されていて、会場内の位置が分かるようになっている。毎年来ていれば、目録を見てどの出展者が自分の見たい人形を出しているか分かるが、それより私は自分の足で通路のはしから端まですべてを見て行った方が良いと思っている。

このフェアは商談が目的で、販売は許可されていないのに、一体ものの人形が棚から消えていることが時々あるので、私も非常手段をとった。毎年金曜日に設定される開催日の開場時間に会場入口にすることが重要なポイント。とすると私は勤務をアレンジして、

（勤務している）週末の図書館がどうなるかと構わずに、他の司書と土曜日の担当を交代するとか、余分に土曜日の勤務をするなどしなければならぬ。でもそうするだけの価値があることだなのだ。

何人ものアーティストを抱えるトーマス・ボランドのブースは、まず一番に行く。完成度も高く素材も変化に富んでいるのだが、人だかりのために作品を間近で見たり、ブースの迷路のようなパネルの内側にいるアーティストに会うのが困難な時がある。ボランドの傘下出身の多くのアーティストはその競争関係から抜け出し、自分のブースをもって会場に散在しており、このフェアに出展するため高額の経費に見合う成功を毎年収めている。

NIAADAのブースも人気のあるブースである。目録に掲載されている「NIAA/INC./BARBARA STEINER」とは、NIAADAアーティストの半公式グループの名称であり、アーティストの数も名前も年々変わってきている。説明として「一体ものと限定生産品のアーティスト・ドール、展示されたすべての作品は会員自身によって選出されたNIAADAアーティストの制作による」と書かれてある。その作品の出来ばえは常に素晴らしく、且つそれぞれが決して他のアーティストと見誤らないだけの個性がある。だがそれでも、NIAADAは独創的な人形の芸術性という増長する大海の中の、ほ

んの小さな魚に過ぎない。世界で活躍するドール・アーティストの多くが何を制作しているのかというのを考えると、脅迫めいて聞こえるかもしれないが、NIAADAのアーティストの仕事はある距離をおいてみることは無駄ではない。第一、これはTOY（玩具）フェアっていうんだから！？

その他にも、量産モデルのためのNIAADAアーティストの人形はあった。アストリー・キャンベルはポーセレン人形が気に入っており、自分の典型的な作風からかけ離れたデザインをシルドクロット社のためにしている。ロバート・トナー人形社は豊富な在庫の中から販売可能な選りすぐりのモデルを実にプロフェッショナルに展示している。マギー・イアンコ、ヘレン・キッシュ、カール・トンブソンは、ヨーロッパ・アーティスト・ドールが代理店となっている。（といっても皆アメリカのアーティストだ、私はいつもバイヤーが混乱しないかと思っている。）ビル・ネルソンは、ボランドのブースを借りているNIAADAアーティストである。

トイ・フェアでは、まず相手の許可を得なければならぬけれど、撮影に対してはとても自由なポリシーがある。私のニコンは私の七つ道具。とにかくこの短い期間にあった多くのことを把握しておくには、この方法しかない。今年は

控えめに二百枚しか撮らなかった。そして何ダースもの名刺、チラシ、カタログ。荷物運搬用のカートを持ち出さなければならぬけれど、私はこの成果を評価している。多くの場合、出展者は自分の人形についておしゃべりする時間がもてないし、私もビジネスをしに来ているアーティストに私と話す時間を割いてほしいとは思わない。

閉場を予告する照明の点滅がある午後四時まで私は会場にいるようにしている。それまでには人形の姿が私の頭の中をゆらめいて、体中の骨がきしんでくる。残された一時間で再び訪れたいブースはいくつかあったけど、私はエスカレーターに飛び乗り出口を通り抜けて行った。取材に十分満足し、もう早速、来年のトイ・フェアを楽しみにしながら。

終

（もちろん、あるドール・アーティストが私のバッジを見て話しかけてきて、彼女が何年も私の記事を読んでいて、多くのことを学んだって聞いた時は、ぞくぞくしたわ。）



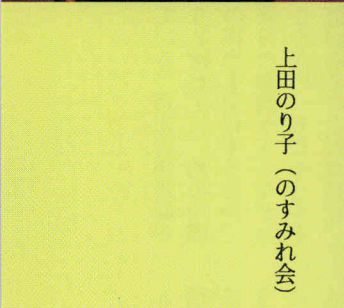
こうちときよ (花と人形達)



坂本栄子 (花と人形達)



石井美千子 (花と人形達)



上田のり子 (のすみれ会)



荒木野馬 (創作人形展)



佐々木美美子 (創作人形展)



宮森邦子 (アトリエ・アイドル)



木下まり
(エコール・ド・シモン)

展覧会より

サ化と人形たち

第四回 今輝いている女性達展

三月九日〜十四日

大阪 なんば高島屋ランドホール

雑誌「銀花」で取り上げられた六人の女性人形作家と、細工もの、花の装飾を専門とする総勢八人による展覧会が、文化出版局の後援で開催された。

本誌二号の表紙となった山口景子さんは、黒を基調にしたシンブルな空間演出で、「還る水」など舞台付きの作品などに小品を合わせ十六作品を展示。

一号で紹介した松本昌子さんは、各国の古裂を組み合わせ、沈黙の中に音楽を感じさせるような作品十四体に加え、ストーリーを感じさせる小品群を素焼きの陶器で発表した。

四号に登場したくら田たまえさんは、鬼百匹の中からの一連の作品。凄みがある鬼たちのユーモアあふれる世界が見る人に笑いを誘う。

坂本栄子さんの木彫・胡粉の作品は軽妙洒脱。落語に登場しそうな江戸っ子の日常風景にそれぞれ作者の川柳が添えられ、そのウィットに思わず唸られる。

ライト・グリーンが爽やかな、こうちときよさんの展示場所では奔放で躍動感のある妖精の群れを展示。白い胡粉の肌に空洞の目と口の部分が、見る人に自由な想像を抱かせる。動きを感じさせるものが好きとのこと、人形は一定のポーズに固定されない関節人形。

石井美千子さんは、まだ人形を作り始めて年が浅いというが、子供を中心に戦後間もない昭和の情景を群像で再現するその表現力は必見である。石井さんは今夏、阪神大震災からの復興を願うメッセージを込めた展覧会を大阪で行う。

それぞれの展示場所は、作家の希望に添ってデザインされたことでガラスはな

く、高めの陳列台でじっくりと作品を鑑賞できた。当然のことながら、それぞれの作品は完成度が高い。作風やモチーフも異なる作品が一度に集め、この国の人形文化の豊かさを再認識した。それだけに、このような展覧会が一週間を幕を閉じてしまったのは残念な限りである。

現代創作人形展

二月一日〜二月八日

プラントン銀座

島村龍児氏、若月まり子さんをはじめ、総勢十八人の活躍中の作家による展示会が、プラントン銀座本店のギャラリー・ドウ・プラントンで行われた。企画は創作人形の経験の長いドルスバードである。島村氏は環境問題をテーマに喜びと怒りを表現した十二体の天使の作品群や海外で話題になった彫り物の人形などを展示。若月さんは多数の妖精を展示し、その他の作家もそれぞれのブースで個性的な作品を平均七体程展示。最近低迷気味と言われたアーティストドルの状況の中で意欲と勢いを感じさせる内容となった。願わくば、これだけの作家がそろそろ展示会にもっと多くの一般の人の注目が注がれることを期待したい。

出品作家は島村氏、若月さんの他…滝康子、小林美枝子、小牧多賀子、大槻和子、佐々木美美子、水澄美恵子、木下延子、しまむらちえこ、三輪輝子、石山ヒロ子、荒木野馬、山吉由利子、藤井路以、所由紀子、岡田好永、東山明美。

第十四回 エコール・ド・シモン人形展

三月二日〜七日

新宿紀伊国屋ギャラリー

四谷シモン氏の率いる人形学校エコール・ド・シモンが例年同会場で行っている作品展も今年で十四回目を迎えた。講師の高塚弘さんが言うように同校にとっては文化祭のような作品展で、受講中の生徒から全国各地のOBまで八十点近くの違いの作品が賑やかに展示されている。中には若月まり子さんや長谷川裕子さんのようにプロとして活躍している作家もいる。四谷氏は解体されたイメージの天使像を出展した。

やはり四谷氏の門下だけあって、関節人形が目立ち、個性は異なっているけれども全体的に共通した感触がある。エコール・ド・シモンのカラーとでもいうべきその印象は、完成度の差はあるにせよ、人形が持ちうる気品のようなものではないかと思う。それは可愛らしさや美しさという人形に求められる本質的な部分、また木彫や桐塑に胡粉を刷毛で塗るといった伝統的な手法の基盤の上に、師の前衛的な仕事の影響があって醸し出されているようである。

アトリエ アイドール

創作人形展 95

三月七日〜十三日

田中八重洲ギャラリー(東京)

島村氏というと縮緬を張った優しげな市松人形を連想するが、氏の教室であるアトリエ・アイドールの教室展における三十七人の生徒の作品も、女性の優美さ、子供の愛らしさなどが基本的な印象となっている。市松人形の習作の他、それぞれのテーマに添って、複数の人形に

よりストーリーを感じさせる作品も目立った。香港の日常生活を描き続ける大貫美奈子さんの「The Day」、モングルの草原の子供を表現した横山洋子さんの「あおいはなのさくころ」、宮森邦子さんの「パレード」など独自の人間愛に満ちた世界を表現することに成功している。

島村氏は二体出品、そのうち参考のために出品した「蒼の夜想曲」は七十センチ大の球体関節人形である。講師のしまむらちえこさんもテーマとして取り組んでいる日本の昔話シリーズからこぶとり爺さんと数体の鬼の人形を展示した。

上田のり子人形教室のすみれ△△

第二十回人形展 四月十三日〜二十日

伊東屋ギャラリー(銀座)

戦前より布製のフランス人形の作家として活躍していた故川崎ブツペ氏が昭和三十七年に結成した、のすみれ会を現在は、弟子であった上田のり子さんが引き継ぎ二年おきに作品展を行っている。結成後三十年を越える会だが、それぞれがマイペースに自分の楽しみのために作っているとのこと、子供の情景をいきいきと伝えようとした作品が多い。また、師の川崎氏が追求したであろうモダニズムの美に迫ろうとする作品もある。

石膏やリキテックスなどを使用した作品も見られるが、やはり川崎氏から受け継がれた技術で作られた張り子の縫いぐるみの人形は、独特の味わいがあった。今回は講師の上田さんとともに十一人が出品、川崎氏の夫人である川崎蓮子さんも塑像二体を特別出品した。

後藤 朝子

インタビュ・文 小川千恵子



昨年十一月に銀座ミキモトホールで行われた後藤朝子展。十一本の和紙によって組み込まれた円形の中で、見るものを人形の磁場に誘う十一体の白い人形。やはり天井から下げられた和紙に、横一列に吊り下げられた白無垢の十一体の人形たち。アクリルの台に点在させた十一の頭部。岩の中から浮かび上がるような顔……。白と生成を中心に構成された空間の静謐。「ユニーク・インスタレーション・オブ・ドール・スカラブチャー」と作品を見たあるアメリカ人は評したそうだ。空間全体を大胆に使い、自由に人形の世界を表現するスケールの大きさは、その空間の静けさとは対照的に実に刺激的だった。

後藤朝子さんは京人形司十三世・故面屋庄三氏に師事し、京人形の伝統の世界を経て、現在は香川県高松市で独自の制作活動が続けられている。会場では白いスーツ姿を拝見したが、ご自宅でも上からしたまで白ずくめの「作業着姿」の後藤さんに、一種の神聖なものを感じた。ご自身はとても快活で、明晰な方であり、一言づつはっきりと言葉を確認しながら話される様子が印象的である。ご主人は、漆工芸作家の後藤健吉氏。こちらは黒を貴重とした作品が多く、ご夫婦でコントラストを成している。

10

十一という数

■以前お会いしたときに十一という数には特別な思い入れがあるとお聞きしましたが。

「どういうわけか、最初の個展の時から、十一体ずつ作って構成していますね」

■十一という数は自然に出てきたわけですか？

「ボン、と……」

■自分にとっては収まりのいい数みたいな感じ……？

「収まりがいいというのではないと思います。自分にとっては『動いている』という数字。四十センチとか五十センチ位までの小さな人形は、やはり顔と顔が向かい合う位の距離で見ますよね。一対一のコミュニケーションですね。人形を 媒介にしてコミュニケーションしたいとか、何かを伝えたいなどと思うときに、世の中にはいっぱい人がいるから、人の数だけ無限に作れるといい、と思う気持ちがどこにあるのかもしれない。だけど、時間的なことも含めて、私が今作っているような方法ではどうしても無理で……」

たとえばゼロが始まりの数字だという考えがありますね。でも、私にとってはゼロはゼロで、一が何かたちとして生まれてくる最初の数字。最小の単位なのね。そし

てそれがどんどん無限に広がっていくと、十一、百十一、千百十一……となりますね。その一番小さな単位というのが十一なの」

■なるほど。

「時間的な制約と無限に作りたいというそのギャップの間で自分が作れる数……」

無限に広がる数の中で最小だけだとそれを感じさせる動きのある数字。こじつけかもしれないけれど」

■うーん。色に例えると、たとえばそれは白になるんでしょうか？

「色に例えるのと？ いわゆるその、花嫁があなたのためにいかようにでも染め上げて、というような最初の色みたい？」（笑）

■そうそう。（笑）

「あまりそれは考えたことないですね」

■いつも、何かすぐく広がっていくための基本としての色であり、数である……。コア（核）としての作品？ はぎ取ってはぎ取って、最後に残ったもので見せるみたいな。中心を表現することで全体を表現する……。色も白がそうだし、数も十一というのがそうなるのかって解釈したんですね。

「どうでしょうね。話している間に思い出しちゃったんですが、今のものの考え方自体がそういうふうになっているのかもね」

■それは後藤さんの考え方が？

「いえ、そうではなくて世の中の。部分は全体につながっているというような。部分それ自体が全体を内蔵しているというような……」

たとえば私達の体をつくっている素粒子は移りかわっているんですけどね。身体を構成する物質を自然からもらって自然にかえしていく。今読んでいる本にもそう書いてある。ひょっとしたらそういうのがあって無意識に影響を受けているのかもね」

■どんなふうに？

「十一体でしょ。作品を求めて下さる方がいると、欠員ができますね。同じサイズで補充しますけれど、全く同じ人形は作れませんから、人とか他のものとの相互関係で作品も動くんです。そういう、他との関係によって循環するということのような空間によっても変わってきますし……」

子供の頃

■たとえば、能が表現を凝縮して手で顔を覆うだけで悲しみを表現するように、日本の人形というのは東洋的な美意識がすごくあるのではないか、省略の文化ではないかととらえているんですが。

「そうですね。形態からもそう言えますね。私、胡粉を使っているでしょ、そうするとね、胡粉って塗っては磨き、塗っては磨きなん

です。磨くという行為自体に意図はしなくても、そこに抽象化されるものというのは出てきます」

■削り取っていくみたいなの。

「日本の御所人形もとても抽象化された形です。だいたい子供って五頭身くらいでしょ。それが三頭身にぎゅつと締められていて。だからまったくの具象ではなくてそこに意識的な抽象が入ってますものね」

■そうですね。で、人形を始められたときというのは、面庄先生（故面屋庄三氏）のところに引き始めたときからですか？

「作り始めたのは、五才か六才のころ。小さいときからなんか作っていたみたい。私は外で遊ばなかったから、ずっと家の中で作っていたんじゃないかしら」

■小学校、中学校と…

「小学校の高学年か、中学校のころに、これじゃいけない、と何となく自分で思っ、それを段ボールに入れて何箱も処分した記憶があるの。その中の大事なものは、山にね、わざわざ埋めに行った記憶があります。宝島みたいな感じで地図を描いて。暇だったんでしょね」(笑)

■でもありますよ、その頃の年なら(笑)

「で、その時に一度自分と人形というものを切っちゃったんです

ね、きつと。それから高校一年の時に病気で入院したのね。それであまり重い病気じゃないんだけど長期治療が必要だったので、退屈だったんでしょね、入院患者さんたちの顔のスケッチを始めて、それで退院してから美術部に入って進学コースを美術コースに変更しました。絵を描きたいなって思っ」

■やっぱり絵を描くとなると人の絵が多かったのですか？

「最初のころは風景とか、先生が描きなさい、というものを描いていたけれど、自由制作の時にはいつも人でしたね」

■人の姿にこだわっちゃうんですよね、色々な方のお話を伺っている。

「やはりそれは、自分が生まれてきたことの不思議さとか、自分は何なんだろうっていう問いかけからくるのかもしれない」

陽のエネルギー

■陰陽でとらえた十一という数字の説明を前にお聞きしましたが。

「偶数と奇数、陰陽どちらだと思いますか。十一というのは陽なの。奇数は陽。易学では。一陽来復というのがありますね。一は奇数で陽来福。陽のエネルギー。」

従来の代表的な宗教の数字は十と十二ですね。仏教の十大弟子。キ

リスト教の十二使徒。私は十一。でもいわゆる宗教ではなくて…。

言葉に語弊があるかもしれないけど、『霊性』を自分の中に高めたというのがあります。だからあなたが私の（表紙の）人形を見て仏像みたい、とおっしゃったけどバックボーンは仏教じゃないような気がします。もちろん、日本に生れて育って仏教的な要素はすぐ入っているのだけれど。」

■それはなかなか大変な仕事だと思うんですね。それは後藤さんの、語弊があるかもしれないけれど、宗教観みたいなものですよ。もし朝子教というものがあるとしたらば。(笑)

人形でそれくらいの世界を作るというか、創造主になるということで、ものすごいパワーやエネルギーがいるんじゃないかって思います。後藤さんにお会いして、そのようなエネルギーが強い方だな、というのは分かる気がします。

「そう？ずいぶん前ですけどね、道を歩いていて、あ、エネルギーが歩いているみたいと感じたことありますよ。エネルギーがTシャツ着て、ジーンズはいて歩いている。」(笑)

面庄先生

■面庄先生のところでは、何を学ばれましたか？

「先生からは技術的なこともありますが、京人形というのは生まれてきた子供がすくすく丈夫に育ちますように、というような祈りの気持ちで形象化されたものだ、という思想を伝えて頂きました。いわゆる死者の魂が寂しがらないようにと作られた、はにわとかの埋葬物とは全く異なるもので、生者への祈りが京人形なんだ、と。でも自分の中には矛盾した時期もありました」

■それはまたどういう意味で？

「私にとっては、かつてこの世の中に生まれた魂も、今生きている魂も、そしてこれから生まれる魂もそんなに差はないのね。だからそれを生者への祈りと言い切るところにね、ためらいみたいなものは感じたことはありませんね。でも、なぜ生者への祈りということをやあんなにも何度も何度もおっしゃったのかな、ということは今でも考え続けています」

■で、その矛盾というものは、今でも自分の中に残っている？

「はつきりと自分の中で答えを出したわけじゃないんだけど、もしかししたら面庄先生は、もちろん亡くなった方への想いはあるはず

なんだけど、それを越えてあえて生者への祈りとしたところに、ものを作る上でのはつきりとした思想や哲学があったんだと思います。

それは、私が矛盾を感じているというレベルを越えて、亡くなった人とかこれから生まれる人へとかいうことも越えて、でもなおかつ今、生きている人に祝福を与えたというすごく強い生命讃歌があったんじゃないかって思っています。まだ結論出したわけじゃないけど、これから考え続けていくけれども。この『生者への祈り』がまずあって、自分の中に入っています」

■本当に良い先生だったんですね。

「恵まれていると思います。人形を作っていく流れとしては、これ以上ベストの状態で歩まされていないような気がします」

■先生の中で、自分で引き継ぎたいな、と思われる部分は？

「先生の人形はとても明るいもの。その明るいっていうのは私が感じることなんだけど、やはり先生が生者への祈りっていう、はつきりした思想を持ってらしてそれが形になった時に、明るい人形として出てきたんだと思います。その明るさっていうのは、やはりすごいなと思います」

■陽のエネルギー？



ミキモトでの展示風景

「そうですね。陽のエネルギー。この間、奈良の法隆寺に行つて仏像見たんだけどね、やあ、明るいなって本当に思っちゃった。もし自分がものを作ることによつて、生きてるってことに参加させてもらっているのならば、できることならいいエネルギーをもらつて、それをさらにろ過して浄化していいエネルギーを出しているようなものを作りたいと思います」

胡粉粉

■そのろ過して浄化して、というのは胡粉の工程に似てるんでしょね。

「似ています。胡粉の上塗りとは、こし紙でろ過して上澄み胡粉を塗り重ねます。本当にその作業の工程と伝えたいものが一致してますよね」

■そこに精神的な美しさも反映されるという・

「されると思います。とても品がいいもの」

■今、胡粉をやりやすくアレンジして使われる方がいらつしやいますよね。ポンドで混ぜたり、スプレーで塗ったり。

「私自身は胡粉をスプレーで塗ろうがポンドで混ぜようがその人なりのやり方でそれはそれで良くつて、全然否定もしないし、それが長期的なメンテナンスに耐えて胡

粉よりいいことだってあるかもしれないし、新しい使い方がいいんであればいいんじゃないって思います。でも時間の経過を経てみないとそのアレンジした胡粉の結果の良し悪しは判断できませんね。私もなるべく時間を作つて伝統的な方法と平行して新しい素材の研究をするべきだと思つています」

■伝統的な胡粉の工程が、自分の精神性とマッチしているということでしたが。

「そうですね。胡粉仕上げの人はあまりにも時間がかかつて、この忙しい時代とは掛け離れていすよね。だからといって、私は仙人みたいに、この世の中から隔離されて生きていくわけじゃないから、リズムのギャップは考えることはよくあります。研究不足じゃないか、とか自分が伝えたいことは他の素材でもできるかもしれない、とか。でもそれを越えて、胡粉が美しいというのはあります」

■特に白はごまかしがきかなくて難しいっていいですね。

■「難しい！」

■また、白は難しいけれど、なおかつ表現を白だけでもたせられなくちゃっておっしゃっていましたね。

「この間（昨年の十二月）のバリの展覧会の作品について『彼女の作品は二つの目だけで主張している』と紹介されていたんですけれ

ど、そういうことは考えたことはないのね。そういえばそうなのね。私は、白だけで語らなくちゃって思っているわけではないけれど、ちかちかする色を削っていったら白だけになったということかもしれない。それと、衣装をつけたものを脱がせちゃうとね、それがすごく清しくて、いいなって……」

■エロティックであることとは別に？

「エロティックというのはものすごく難しいですね。それはたぶん私、課題だと思ふんだけど、エロティックさにもね、男と女のエロティックさと、もっと大きなエロティックさ……。湿った森の中にもエロティックな気分ってありますよね。そうすると、エロティックというのは良く分からないけど、決して固いものではない気がするのね。硬質なものはいい」

■今回の表紙の作品の解説をしていただいた方が良かったかな。それとも見た人の感性に任せただ方が良かったのでしょうか？

「それでいい。もしかしたら作った本人も分かってないのかもしれないし」（笑）

人形のスピリット

■後藤さんの今までの経歴を拝見すると、海外で作品を発表されたり恵まれた進展ですよね。

「でも、自分はまだまだだと思う。他の人と比較するとかいうことではなくて」

■この間のミキモトの展示を見ると、この次はどういうことをやるのかな、って期待しますね。

「あの時は、ひとつの空間の中にあまりに色々な要素を入れすぎました。反省しています。もっとシンプルに、もっとストレートに自分の伝えたいことが伝わるような発表をしなければ。人形って、抽象化されていますよね。その人形で言えるスピリットで、会場に入っただけでビッと感じさせる、そういう緊張感の高い空間、場を作りたいですね。」

■人形で言えるスピリットって何でしょう？

「何でしょう……」

■安らぎ？

「ある方の言葉を借りるとね、『引き込んで魂を鎮める』。まさにそのとおりだと思います。学生時代にレオナルド・ダ・ヴィンチの聖母像とポッティチェリのピーナスをならべてみていたことがあるのね。両方ともとても美しいの

だけど、グ・ピンチの目は引き込むわね、で、ポッティチェリの目は語りかけるの。それは私を感じて、こうだ、というふうにはいえないんだけど。人形って、人を引き込むことができますね」

■その両者の違いは、私が見ていて東洋と西洋のアーティスト・ドールの違いにも当てはまるような気がします。人形を見る意識のベクトルが違うんだと思います。でもいい人形には、見る人を引き込む力が確かにありますよ。

「人形自体が持っている気、力ってありますよね。人だつてそうでしょう、際立った人ってあまり話さなくても分かるじゃない」

■人形のスピリット、つてとても大事な部分だと思う。

「ミキモトでの展覧会の時に副題をつけたのね。十一体だから11

(イレブン) スピリットつて。

私が人形を作るのは、なにか精神的なものに引かれ、そういう精神が放たれるひかりのようなものを作りたから。今こうやって生きていて、何か大きなものに守られているような気がするからで、そういうものを感じていたいし伝えたいからだと思うんです。だから形式ではなくてスピリット。とまらなくて解き放たれる精神。自然と調和した新しい安らぎの心を提起するのが11(イレブン) スピリット。西洋的な発想とは異なっ

ています。そのスピリットの違いが、私に人形という手段を選ばせているのかもしれない。

それでね、いろんな作品があるというのね、スピリットが違うんだと思うのね。人形には背景がない分、背景になるべき空間との響きあいを、人形は自分の中に内蔵しているのね。その背景というのは人形の作者が生まれてからいつも感じてる不思議さとか、直感とか意識や哲学や思想、全部ひっくるめたものがバックボーンになるんじゃないかなって思うの。だから人形を見て生まれてくる好き嫌いというのは、もしかしたらその人形から伝わってくるバックボーンが見る者にとって居心地がいいとか悪いとかいうことなのかもしれない。

自由であること

■すぐく自由なんですよね、後藤さんは。何にもとらわれていないような。時代であるとか、この世とかあの世とかいうことも越えているし、人形がアートかということにこだわっていないし・・・。後藤さんの人形の形がベーシックな基本形で、なおかつ色も白しか使わないというのは、自由の象徴みたいな部分があるんでしょうか。

「人間関係のしがらみみたいなも

のには、あまり拘束されていないかもしれません。というより、単に縁がないというだけのことなの。また、拘束されそうなどころにも行かない。なぜ、そうするかという、百年も二百年も生きるわけじゃないでしょう？ものを作っていて、目がクリアに見えていて、手がしつかり動いて、エネルギーがいっぱい流れ込んでくるなんていう状態は限られていると思うの。十年とか何十年？そんないい時をたとえば根回し作業なんかに使ったらにもったいないものね。でも私ね、正直に言う、私自身は自由じゃないよね」

■そうですか？

「最近ある出会いがあつて、その人を見てみると、クレイジーで、自由で・・・」

■その人は自由なんですか？

「自由ですね。もちろん自由であるための生活苦はありますけど(笑)。その人はバリーに住んでいて、difficult(難しい)、crazy(クレイジー)、beautiful(美しい)つていう三つの言葉をよく使うのね。確かに彼を見てみると、クレイジーだからデイクルトなんだけど、だからこそビューティフルなのね(笑)。そんなの見てみると、自分は自由だつて思えない。でもその人は私に、君は自由だよつて言うわね。自分で自由だと思つて自

由を選び取れば自由なんだと思うわ。たとえば、事故とかで家を失ったり身内の人を亡くしたりするでしょ。その時にもしかしたらエネルギーは出てくるかもしれないよね。頑張ろうつて。だけど自分自ら、自分にフィットしなくなつたからといって家も身内も捨てるつていうのはきついでしょ？外から与えられたものは受け入れられるけど、自分の選択によってそれを自ら捨てなくちゃいけない、つて特に大変でしょ？

■たとえば、女性が離婚して自由になるんだ、つていう時は大変ですよ。

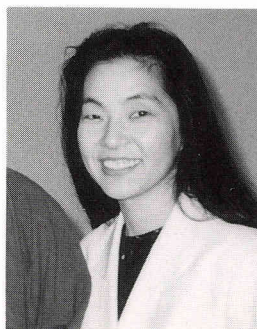
「大変でしょ？」

■ええ。でも、今の時代は、後藤さんのような人を待っていた、というようなことはあると思うんですよ。後藤さんのように制作を伝統的な方法できちんとおやりになつて、なおかつ自由な精神で前衛的なお仕事ができるというのは、重要な存在だと思うんです。伝統的な胡粉についてもちゃんと修得していない方が多いと聞いていますし。

「そうね。友達に新聞記者がいて王道を歩いてほしいつて言うのよ。でも何が王道だかね」(笑)

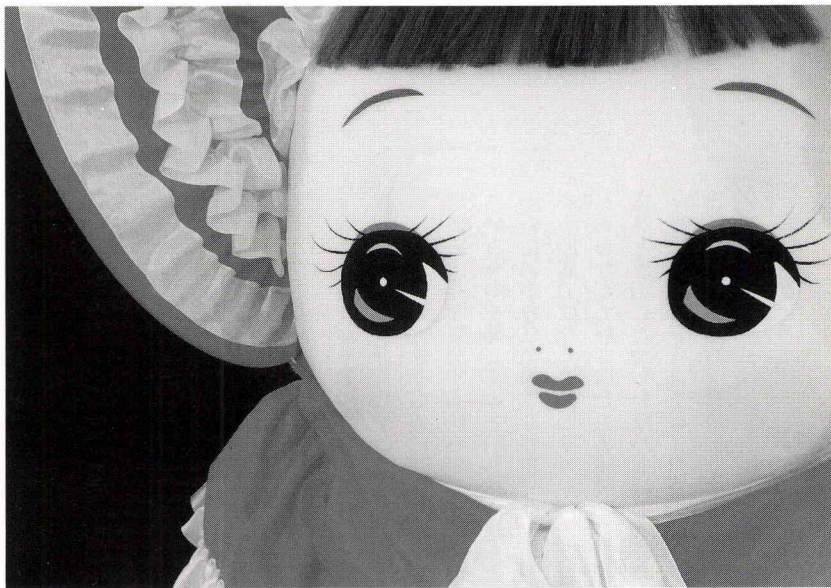
【 後藤朝子 略歴 】

- 1950 11月11日香川県高松市に生まれる
- 1972 武蔵野美術短期大学油絵科卒業
- 1977 京人形司十三世面屋庄三氏に師事
- 1978-1994 天児(あまがつ)会人形展出品
- 1990 個展 高松美術館市民ギャラリー
- 1991 "Dolls of Yesterday, Creations of Today"出品
装飾美術館 パリ
- 1993 個展 ギャラリーKOUKI パリ
- 個展 ポイントJALギャラリー パリ
- 1994 個展 ミキモトホール
- 1994-5 "AU TOUR DE LA POUPEE"出品
ギャラリーLEFOR OPENO パリ



人形つれづれ

福島弘太郎



(第5回) 「冬の時代」の人形作家

展示会場で人形作家に「どう？」と問われたときはもちろん作品や会場についてですが、それ以外の場所で「どうですか？」と言うときは、「景気は……」という無言の接頭語がついている場合がほとんどです。これは冗談や誇張ではなく、ほんとうに今の創作人形が置かれている厳しい状況ゆえなのです。教室にも作家志望あるいはそれに準じた希望を持つ人が訪れてきますが、技術はあってもそれを十分に発揮できないために、それに自信を持って答えることができない現況にはがゆい思いをしているのは私人ではないと思います。

人形をなんらかの形で生活の糧とする作家にとってその収入の手立てが非常に限定されていることは以前から問題にされてきました。具体的な手立てはなかなか考え付きませんでした。場所さえ確保できれば教室等での講師報酬は確かに安定した収入になります。教室と掛け持ちで残った時間を製作に充てる作家がほとんどでしょうが、個人レベルで運営する場合それだけで必要な収入を得るにはかなり製作の時間を割かなければならなくなります。そのようななかで、作家は自分の作品を作

り、多くの場合個展の形で発表するのですが、期間が半年から数年かかりリスクが大きいというに期待できる利潤も経費を除くと思いのほか少ないために冒険できず、いきおい商品的なものになりがちな危険性も持っています。

自由な発想と創作性を維持するためには、生活を支える基盤を人形以外に持つというの良方法かも知れません。また教室や展示会以外にも、ショップに委託で作品を置いてもらうとか、不定期ではありますがデパートの企画、通信販売等の方法もあります。本誌で行っている誌上ギャラリーやパソコン通信によるネットワーク作りなど、メディアの利用は今後市場の拡大に大きな力となるでしょう。

アメリカの人形関連のブックカタログを見てみると、作品集や技法書と一緒に人形をビジネスとして成り立たせるためのハウツーを指導した本が何冊もあるのに驚かされます。日本と環境も違うためにそのままでは参考になりにくい面はありますが、とかく隠匿したがる我々にとつて、積極的に愛好者を広げていこうとする姿勢に学ぶところは多いにあります。また雑誌等を見ても、作品の写真と共に価格もオープンにされており、種々の作品を比較できるためにある程度のレベルと価値の基準を維持するのに役立っているようです。

日本の創作人形はまだアート的な評価が低く、価格も量産品との比較で判断されることが多いのですが、これは個人から個人へ直接販売されるゆえの弊害でもあります。これは決して値段だけ高くつければ良いという訳ではありません。それよりも所謂床の間芸術的な枠から早く脱却し、イメージの多様性、即ち創作性そのものの価値が判断されるようになっていくことが今後の健全な発展の方向性でしょう。

戦後何度か創作人形熱の盛り上がりがありました。それらは皆一過性で、あるスタイルが定着すると次なる展開を見ないまま硬直化していききました。現在では素材の多様化と相まって、それを使う手法が先導していく過渡的な段階にあります。これからはそれらの手法を持ちちのカードとして使いこなす、よりアート的な展開を目指すことが創作人形の枠を広げ付加価値を与えていくのだと思います。

【人形作家】

写真の作品は、筆者製作のものです。

筆者の作品は「ベビキドール」「ポップチューン」で見られます。



ポップチューン (代官山)
渋谷区猿樂町12-8
☎ 03-3780-0755



ベビキドール (西荻窪)
杉並区西荻北3-8-9
☎ 03-3301-0638

REVIEW

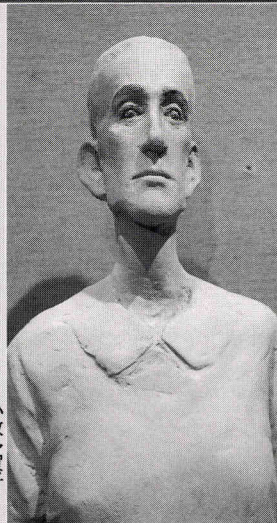
展覧会より



中西京子「狐忠信」



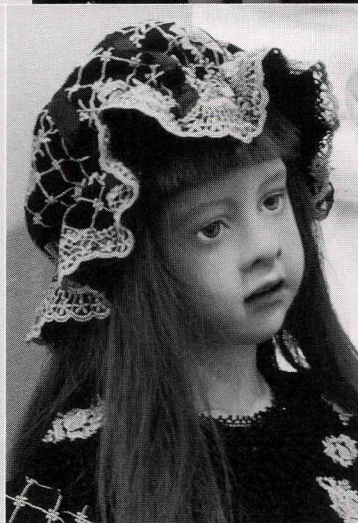
福島弘太郎
江戸川ボラン



高橋猛彦



小牧多賀子



すずきすずよ



山田富子

中西京子「江戸歌舞伎の華」
二月一日〜十四日
ミキトホール（銀座）

小牧多賀子「作品展」
二月十九日〜二十六日
目白千種画廊

すずきすずよ「人形展」
桜の森の満開の下
三月二日〜四月二日
ギャラリー悠（国立）

中西京子さんの和紙人形は、従来の和紙人形の表現の枠を大胆に踏み越えている。好んで題材にする江戸歌舞伎の芝居小屋にあつまる大衆、役者の見栄のポーズが、その意図を助け、生き生きと息吹や躍動感を伝えている。

中西京子さんの名は、国内はもとよりNYのジャパンソサエティや、ルブル美術館での展示などを通し海外に広く知られている。その活動を支えているのが、ジオラマの企画・制作他一切を担当する夫の中西弘光氏だ。会場の中心に展示された中西夫妻とそのプロジェクトによる江戸歌舞伎の芝居小屋のジオラマには、それぞれ違う衣装で思いつきのポーズをとる人形五百五十体が配され、見る人のため息を呼んだ。

中西さんの人形に使われている和紙は、人間国宝クラスの作家によるものが中心だ。中西さんはその和紙に耐色性、耐久性をよくするためにこんにやくの糊を使う「紙衣（かみこ）」という伝統的な方法によるコーティングを施す。伝統の技や知恵がこのように新しい表現の世界に生かされることで現代において息付き、発展していくことはこれからの世代を担う側にとっても喜ばしいことである。

モール遊びと人形達
福島弘太郎・江戸川ボラン・宇山あゆみ
二月二日〜二十八日
せ・らゝる（新宿）

チープ・シック・ポップの三つをテーマに、会場は新人の江戸川ボランさんの大小様々なモール人形を中心に福島弘太郎氏の天井まで届きそうな文化人形、宇山あゆみさんの昔懐かしい文化人形などで、子供の頃のおもちゃ箱をひっくり返したような賑やかさだった。

江戸川ボランさんの作品は、色彩はサイケデリックでアイディアはパラエティに富み、ユーモアあふれる六十年代のシーンを再現した数々のジオラマの人形から実物大の楽器や椅子までモールのマクロな文化人形は最大2m以上。だが完成度は高くキュートさはそのままだ。この人形は、その後は十四頁で紹介のお店に展示されている。

DFJ三号誌上ギャラリーに登場した小牧多賀子さんが毎年行っている個展。地方での開催を含め、これが十回目の個展となる。千種画廊は閑静な住宅街の一角にある小さなギャラリーで、小牧さんが気に入って利用している会場であるが、ゆつたりとした作者の作風とベースにあっており、展示は落ち着いた印象でまとまっている。

昨年同様、二十体あまりの和洋人形が右と左に対称を成す。小牧さんのように三、四センチメートル大の石壁で布張りの人形はよく見かけるが、最近ではさらにディテールの表現に深みが増したように、確かに人を引き込んで行く女性ならではの観察によるふくよかで優美な表情の表現がますます充実してきたようだ。

宮岡梅子「人形展」
三月二十一日〜三十日
せ・らゝる（新宿）

一年半前の同会場での初個展に継ぎ、二度目の個展。高橋氏はビクマリオン出身で、今回は布張りの人形などがあつたが、今回は人形は一体もなく、細長くデフォルメされたオブジェふうの作品を中心に十点、シンプルでまったく異なった印象の内容になった。それぞれ作品は指の後が残るような粘土の素地に淡めに直接彩色され、素焼きの陶器を思わせる仕上がりである。

作品が与える一連の枯れた風景のような印象は、絵画畑出身の高橋氏が、自己主張する人形よりも風景になじむ人形を好むことから来ているようだ。その中で、イノセントな成人の人形とは対照的に、子供の目には挑発的である。全体の方向性として逆のものを感ずるが、高橋氏の内面の世界がどのように熟成していくのか、今後を見守りたい。

山田富子「人形展」
憧憬の道化たち
四月三日〜二十九日
ギャラリーオガタ（銀座）

自然で美しい子供のほほえみが印象的である。さまざまな道化の姿をした子供たちを中心に、縫いぐるみの抱き人形から七十センチメートル位までの関節人形が三十体ほど並び、映画や小説で味わったような欧米の古きよき時代を彷彿とさせる。

今回、人形では初個展を行った山田富子さんは、既にフェルトを使ったレリーフや藤工芸の造形などで独創的な作品を発表してきている。とにかく何かを作り表現することが好きで、人形にも楽器など思い思いの小物を施し制作をより楽しんでる。関節の技術を修得するために八年ほど前にエコー・ド・シモンに通ったのが人形制作の始まりだった。この子供たちの愛らしくて少しメラコンリックな世界をまた見せてほしいものである。

アンヌ・ミトラニ



アンヌ・ミトラニのアトリエには、彼女の人形がひとつも置いていない。「出来上がると、すぐオークションに出したりして手元を離れていくから、見せてあげられるような人形は一体もないのよ。制作中のものならあるけど、それにね、手元に置いておくと、また直したくなっちゃうの。きりがないのよ。」とミトラニ。実際、オークションで彼女の人形を「待っている」コレクターは数知れない。

(インタビュ・文 永田千奈)

永田 (以下N) 人形を創りはじめたきっかけは何ですか？

ミトラニ (以下M) アビゲイル・

ブラームスという人形作家が、人形の衣装を縫ってくれる人を探していて、最初は服だけを作っていたのだけれど、ある時、人形本体の方も作り方を教えてもらい、任せられるようになったの。その頃は、皆、無表情に近い微笑みを浮かべて、レースひらひらのお洋服を着ているロマンティックな人形だったわ。でも、すぐに彼女のコピーでいることに耐えられなくなつて、オリジナルを創り始めたの。

N 今の貴方の人形は、どちらかというとレアリストですよ。

M そうね。微笑みというよりは、歯を見せて笑ったり、服もサロベットなんか着てるし。一時はね、泣き顔の人形ばかり創っていたこともあるの。人形は鏡なのよ。自分が悩んでいる時は、メランコリックな顔の人形になるし、逆に笑っている人形を創る時には、自分が笑ってみて、あ、人間笑う時って、こんな表情になるんだ、なんて再確認したりして。とにかく、人形を創るときは、内面に秘めた感情を、実際に「感じる」ことが必要なの。だから、顔、表情に時間をかけています。眼差しがとても大切。

N 子供を題材にしたものが多いですね。

M 子供は、瞬間、瞬間の表情にはっとさせるものがあるから大好き。内面がストレートに表現されるでしょう。でも、マンネリ化するの嫌なので、そろそろ別のものにも挑戦したいわ。大人とか老人とか。とにかく、いつも進行形でいたい。リスクもあるけど失敗は恐れない

し、何にでも扉を開いておきたいのよ。

N 素材はいつも樹脂ですか？

M そう。透明感があるし、何よりも複製がきかないのが気に入っています。同じ人形は一度とつくりたくないのが魅力。布類は少しづつ集めて、今はこんなに（アトリエの棚は布でいっぱい）。前はよく蚤の市も行ったわ。一体にどのくらい時間をかけますか？

M 三週間ぐらい。よく働くのよ、朝から晩まで。アトリエから家に持ち帰ることもあるし。複数の人形を同時に作ることもあるけど、とても疲れるわ。出来るだけ、一体に集中したい。

N ところで、子供の時から人形は好きでしたか？

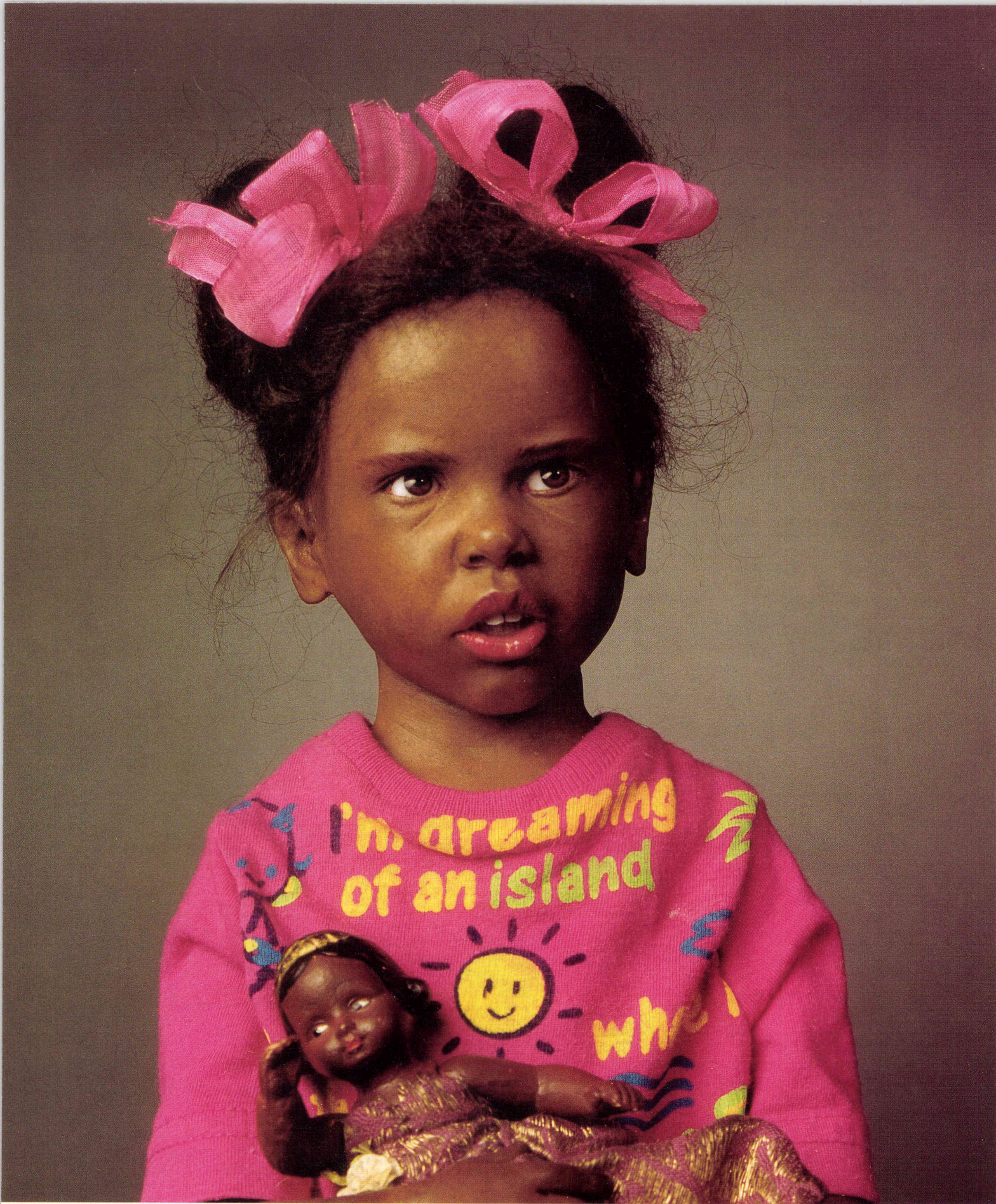
M 大好き！おもちゃの抱き人形から始まって、十歳ぐらいの時、叔母がビスク・ドールをくれたの。ジュモードだったかしら。叔母はね、その人形が怖いから部屋に飾っておくのが嫌だって、私にくれたの。でも、私は、怖くなかった。それどころか、夜、人形と別れて寝るのがつらかったほど、その人形に

魅せられてしまったの。それまでの一緒に遊ぶ人形とは、別の世界がそこから始まったのね。今後の目標は？

M まだまだ変わっていききたい。それから、人形教室も開きたいな、と思っているの。私は人と話すことが好きだし、人形製作というのは、とても孤独な作業だから、何かよりどころがあるといいな、と思うのよ。

ミトラニのアトリエを出たところで、すれちがった少年は、彼女の人形にそっくり、いや彼女の人形が、それだけレアリストなのだ。どこにでもいる子供たちを、彼女しか作れない人形にしてしまったのが何とんでもミトラニの魅力なのである。

(一九九五年三月十一日
パリ十五区のミトラニの
アトリエにて)



A n n e M i t r a n i
f r o m o v e r s e a s

私の仕事は作る側と買い手の両者を相手にして観客を集める脇役に過ぎません。

創作人形が量産に向けて宿命を克服するためには、作家自身も個展、グループ展、教室展やマスコミなどあらゆる機会を利用して質の高い作品を発表し、一部の収集家だけでなく一般の人々に向けて創作人形のPRに貢献することが現在、真剣に取り組むべき課題ではないかと思っています。私が企画した8回の九州地区巡回展においては、創作人形を初めてみた人が90%以上、人形を買おうという人はとても少数に限られます。展示会の経費さえ回収できないことの方が多いです。一点も売れずまったくの赤字という時もあります。

私が真の愛好者を求めて恒常的に作品をギャラリーに展示し、人形と出会う機会を少しでも多くするため各地で展示会をするのは、そうした活動の結果として、作品が売れることを期待するからです。目的を金儲けするためとは考えたことはありませんが、ギャラリーを維持するための栄養分は必要です。理解ある作家と援護者も欲しいと思います。

制作者、販売者、購買者の三者の思惑がすべての点で一致することは理想であるけれども、そのような作品は数が多くないと思われます。それは①作家の満足度、②客受け、③価格の三点を調和に近づけることは困難なことだからです。しかし、制作者個々の力量により、この三点を近づけるのは可能だと考えます。

人形の場合は誰かに愛情を注がれることを願って創られると思います。子供が独立して新しい伴侶を得るように、手放す愛情もあらねばならないでしょう。人形と人との関係は、深く、強い心の交流である個の結びつきによって初めて生を得ることを考えると、大勢の人の見せ物になっているだけの人形や作者の部屋のガラス戸棚に閉じ込められている人形たちは、果たして幸福に生き続けることができるのでしょうか。

広く人形愛好家を増やすためには制作者、販売業者双方とも購買者に満足してもらうよう作品の質の向上安定を心かけ、技術面においても安心して提供できるように努力を怠らないことが人形市場を拡大し、ひいては関係者の生活を安定させ、若い制作プロを育て継続的な隆盛につながっていくと思います。

作品価格については全国的な相場が確立していない現在、価格設定に制作者の意志が大きく反映しているように感じられます。制作プロは、作品の出来具合の結果のみで自由に価格を決めるべきです。幸いまだキャリアや名前で価格が決められるような悪しき慣習には陥っていないようですから人形界の正常な発展に希望がもてると思います。

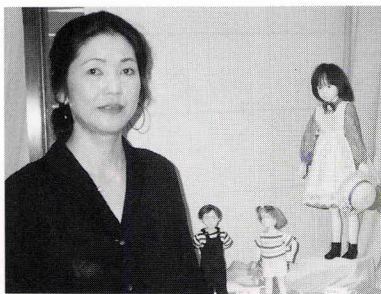
ドール・ギャラリー ラ・ファミーユ
中島健一

ドール・ギャラリー ラ・ファミーユ

文・小川千恵子

おそらく現在、アーティスト・ドールを扱う専門店としては、全国で唯一ではないだろうか。アーティスト・ドールを愛好する者、創る者にとって救世主のような中島健一・幸子夫妻が長崎市の中心地である浜町のファッションビルに六坪あまりの「ラ・ファミーユ」をオープンして二年余り。常時四十点あまりのアーティストドールが展示されている。

だが、読者の方々も容易に想像がつかれるだろうが、その道は決してたやすいものではない。その悪戦苦闘ぶりは、ここに掲げる中島氏からのお手紙でも伺えるが、私もビジネスにも携わる立場からの感想をお許し願えば、実に業者の肉声として深く共感するものである。このような困難な状況の中、ラ・ファミーユでは全国の三十五人の作家の作品を扱い、九州各地で巡回展を行い、店でも年四〜五回の企画展を行っている。とにかく人目に触れることが何より先決問題、と新聞やテレビなどのマスコミ関係にも積極的に働きかけてきた。それらの案内を通じ、遠方から楽しみにして来た人が思わず口元をほころばせたりしているのを見ると損得を離れて喜びを感じる、と中島さんは言う。



ラ・ファミーユの中島幸子さん

人形を扱うきっかけとなったのはスペインの土産品店にあった自販車に乗った少女の人形だという。その動きに日本の静かな人形にないものを感じたそうだが、ラ・ファミーユには、日本の人形界になかった新しい側面を担うべく大いに活躍してほしいものだ。

ドール・ギャラリー
ラ・ファミーユ

営業 十時半〜二十時

第一・三木曜日休館

〒850

長崎市浜町九一八 カロム4F

☎〇九五八二二五九二四一

新連載

お化け屋敷店長日記

文・伊沢 魔宮 ピノン

第1回 “箱がない！”

新参、駆け出しもいいところの私も、出来上がった人形を梱包しておく機会に恵まれました。

人形が出来上がるまではとても調子良かったのです。制作中は完成させたらそれで終わり、と軽く考えていました。

人形は50cm以上ありますから送るのは60cmくらいの箱が欲しいのですが、私の家にそんな大きな箱はありません。お昼頃、まずは家の近くにある梱包材料のお店に行きました。ここで絶対に売っている、と確信していました。

ところが無い！

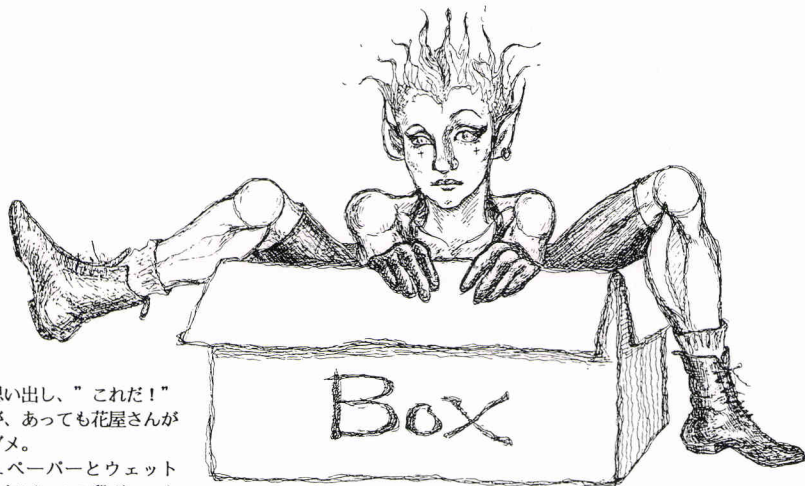
お店の人が出してくれたのは、とってもスーパーグラマーな段ボール！私の送ろうとしている人形が10個くらい入りそう。

「こんなのカッコ悪くて絶対嫌！」と、まだその時は美しさにこだわっていたのです。

次に行ったのは大きな薬局さん。お店の裏にある無数に詰まれた段ボールの山を見た時はとても幸せな気分でした。この中にひとつくらい、望みどおりのスリムな箱があるだろうと思いました。

でも、ないのです。

でもとにかく、それぞれのお店で大きな段ボールを二つずつ、キープしました。



それから花屋さんの箱を思い出し、“これだ！”と思って行ってみたのですが、あっても花屋さんが使うものだからと、これもダメ。

そこで私は、ティッシュペーパーとウェットティッシュとセブンスターと缶ビールの段ボールを両手に抱えて—というよりも疲れて持ち上げることすら出来ずズリズリーとブキミな音を立てながら引きずって帰ったのであります。お化粧はすっかり落ちてしまい、髪はボサボサ、足は痛いしアゴばかり前に出てちっとも家に近付かないのです。

頭の中はハコでいっぱい

ハコ、ハコ、ハコ、ハコ、ダンボール…

結局使用したのはアサヒビールの缶の詰め合わせボックス。ネイビーブルーに赤字のかわいい段ボールでした。梱包が終わったのはもう八時くらいになっていて、フラフラしながら近くのコンビニに持って行きました。

2〜3日中にまた、人形を送るのです。今度はヤオヤさんでもらったセロリの段ボールです、ハイ！

ひとつ勉強しました。人形を作るのと同じ位のパワーで梱包しないと、壊さないと、思いどおりの梱包は出来ないらしい、ということ——

今号よりDFJ2号の投書欄に登場した尾崎信子さんと魔宮ピノンさんが、イラストとともにビギナー・アーティストが経験するさまざまなことをエッセイに綴ります。

◆被災地域の方からこのようなお手紙をい

【明石市 高野榮子】

被災地域の方からこのようなお手紙をい

◆DFJ VOL.4、とても楽しく読ませて頂きました！

震災のため、通っていた人形教室がなくなってしまい、作りかけの人形達をどうすればいいのか・と不安で少し悩んだりしていました。DFJを読んで、一人で細々とでもやって見ようという決心・というか、勇気が出てきました。

長田の親類が亡くなって、自宅も半壊なので家の中ですら人形人形と騒げる状況ではないような雰囲気がありますが、教室が再開されるまでDFJが先生と思ひ、頑張って作っていかうと考えています。今後とも、よろしくお願ひ致します。

◆私も堀柳女さんの作品は始めて見ました。作品から伝わるその気品、気迫、美しさは、現代においても遜色がないどころか、道のりの遠さをただ感じる思いでした。六月の横浜人形の家で開かれる日本人形玩具学会の展示（一般人場可）では、この時とは違う堀作品の他、故人の作品も展示されますので、お楽しみに。

C

◆DFJ、また一気読みました。本当に良かったです。吉田先生の言葉は、人形を創る人の言葉としてつたわってきます。表紙もすてきでした。生きていくようです。弘太郎先生のコラムも印象に残ります。

【青梅市 杉山久江】（後略）

◆人間国宝展、二十八日に見て参りました。堀柳女が見たかったのよかったです。全体で身の引き締まるような感じでした。せ・ら・る・で、モール（江戸川ボランさんの作品）見てきました。細かくて、よくここまでと思ひました。モールも、文化人形も、幼い頃の記憶を呼び起こすような懐かしい感じでした。

ただくとほつと致します。関節人形の作りかけで分らないところがあるのようですが、技術的な質問も誌面で受付いたしますのでお送り下さい。

◆DFJをお届けしている美術学校等からメッセージをいただいております。

◆第4号をご寄贈下さいまして誠に有難うございます。今後ともご刊行の際はご惠送下さいませようお願ひ申し上げます。

—— 武蔵野美術大学美術資料図書館

◆貴重な参考資料として広く教員学生の閲覧に供し、ご厚意に添いたいと思ひます。

—— 女子美術短期大学図書館

◆VOL.1よりファイルさせていただいております。学生への資料として利用させて頂いております。

—— 広島芸術学院

◆表紙のお人形の何とも云えぬ自然の表情に感動致しました。資料として保存させて頂きます。

—— 桃園学園造形専門学校

◆この他にも、多くの美術教育関係機関から資料として活用して頂いている旨、メッセージをいただいております。

☆DFJ事務局より

・DFJのバックナンバーの一号、二号、三号は在庫切れとなりました。版も処分されているため再版はできません。もしバックナンバーの内容をお知りになりたい方は、白黒コピーを实費にてお分け致しますので、事務局までお問ひ合わせ下さい。

・DFJは東京都国際交流財団の助成事業として七月に「日米ドールアート文化交流事業」を行います。NIAADAにおける小川事務局長のスライドプログラムを中心に日本と現地の人形作家の交流を試みます。レポートは次号にてお伝え致します。

投稿募集

【LETTERS】感想、ご意見、ご希望など

【CS（新人紹介）】自薦、他薦を問ひません。まず、写真をお送り下さい。

【REVIEW】個展、展覧会の感想。400字程度

*以上の採用分には、リーセ葉書セットを進呈。

【INFORMATION】ニュースがあったら何でも

【近況報告】プロの作家の方の最新作の発表の場です。

応募はCSに準じます。（採用分には規定稿料をお支払いします）

【教室、個展他の案内】随時受けつけます。

*応募は、項目を明記の上、DFJ事務局まで

編集後記

ドル・フォーラム・ジャパン事務局長 小川千恵子

☆ DFJ 2年目を迎えた今号は特別版として、オーストラリアのダイアン・ハーグリーブス編集長が廃刊となったコレクティブ・ドールズ・アンド・ミニチュア誌に掲載を予定していた記事を迎えた。ご存知のように、欧米の雑誌と日本の縦書きの雑誌は表紙が反対なので、今回のDFJは両面から楽しめる。タイトルも、DFJからジャパンのJを省いた。オーストラリアのスローガンは「リビング・トゥギャザー」。異人種の混在する社会でお互いうまくやっていこう、という思いが込められている。DFJも、いつかは本当にDFJとなって、豊富な情報や共通の価値観をもって、各国の人々と芸術の人形論を展開していけることを目指したいものである。

☆ 年を一巡し会員も順調に増え、昨年と同じ頃ドル・アートの認識と地位を高めたことを思えば、嬉しい限りである。ネットワークも広がり、何かとドル・フォーラム・ジャパンを気にして下さる作家や関係者、読者の方が増え、大変にありがたい。「大変でしょう？」といわれもし「大変じゃない」と答えたら嘘になる。だが、その大変さを承知して始めたことであるし、多くの人との出会いによるそれ以上の喜びという報酬を得ている。それにドル・アートを仕事として選ぶ人にも大変でない人は少ない。

☆ 今回は奇しくも長崎のラ・ファミーユの中島健一さんと、福島弘太郎さんが違う立場から、ドル・アートの市場の狭さの問題を指摘された。とにかく世の中の多くの人に、ドルアートの作家の仕事を見てもらい、批評を受ける回数を増やすのがこの業界の最優先課題である。6月に行われる人形玩具学会のイベント、木曾駒ドルミュージアムのオープンは、今後の日本のドル・アートにとって有意義なものである。会員の方の高い関心を期待したい。

投稿募集

- 【LETTERS】感想、ご意見、ご希望など
- 【CS（新人紹介）】自薦、他薦を問ひません。まず、写真をお送り下さい。
- 【REVIEW】個展、展覧会の感想。400字程度
- *以上の採用分には、リーセ葉書セットを進呈。
- 【INFORMATION】ニュースがあったら何でも
- 【近況報告】プロの作家の方の最新作の発表の場です。
- 応募はCSに準じます。（採用分には規定稿料をお支払いします）
- 【教室、個展他の案内】随時受けつけます。
- *応募は、項目を明記の上、DFJ事務局まで

DFJ購読方法

ドル・フォーラム・ジャパン（DFJ）は書店では販売されていません。購読は、会員購読制です。DFJは年に4回5月、8月、11月、2月に発行されます。

お申込は、年会費5千円を下記の方法でご送金下さい。

*郵便振替 00120-8-717693

「ユーラシア・ドールズ」

（通信欄に、「DFJ」と明記する）

*現金書留 または 郵便小為替

バックナンバー

4号（表紙・吉田良一）のみ。

会員の方は1部1000円です。非会員の方：1400円

ドル・フォーラム・ジャパン第4号

1995年5月19日発行

編集発行：ドル・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57

☎0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者：小川千恵子

印刷：株式会社 日出島

ドル・フォーラム・ジャパンは ユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

継続手続きはお早めに！

今号で会員期限の切れる方には郵便振替用紙を同封しています。継続会員の年会費は、4500円となります。（翌号発行までにお申し込みのない場合は、無効となりますのでご注意ください。）

次号は8月19日発行予定 DM同封希望の方（会員のみ）は8月15日必着
個展など情報の連絡は、お早めにお願ひ致します。

*本誌掲載に記事・写真の無断転載・複写を禁じます。

DOLL FORUM JAPAN 3-27-57 Kumegawa, Higashimurayama-shi, Tokyo 189 JAPAN tel 81-423-95-7547 fax 81-423-95-7975



'My father as the family bulldog'

MAXINE MORGANSEN A New Discovery



'Appearing One Night Only'



"Shim" 18 inches, super sculpey and paperclay 1993

The Incomparable Artistry of E.J. Taylor



"Christmas Elves" 15 inches, super sculpey and celluclay. Tiffany's Christmas

MAXINE MORGANSEN - A New Discovery

by Diane Hargreaves

Maxene Morganson is a talented new Artist, living in Australia, who has only been making original dolls since late 1993.

She is working in miniature, using both true dollhouse scale of 1/12th (1 inch to the foot) and slightly larger museum scale of 1/10th.

Her dolls are direct sculpted in fimo, and have been created as dolls in their own right, not to be incorporated into dollshouses. The reason for this is obvious when you see examples of her work. Each of her one-of-a-kind creations is presented in vignette scenes and stands alone to tell it's own story.

For example, the scene of two children riding on the back of the family bulldog is based on Maxene's own experience as a child. She says that the family bulldog was totally devoted to her when she was young. It was very protective of her, and followed her everywhere. When her father became concerned about the dog and would chase it away, Maxene says she became unsure which of the two of them was actually her father.

When she created this scene, Maxene made the bulldog in her father's likeness, and the little girl on the dog's back is a portrait of herself at a young age. She has also incorporated her husband into the scene, as she used a portrait of him as a child as the model for the little boy seated behind her.

Maxene makes many of her figures as animals, dressed as humans. The scene titled 'One night only' shows the depths of her imagination. Do you suppose the fish figure seated at the piano is really quite oblivious to what is in store for him? Or is he simply refusing to acknowledge that after the show, he could be 'dinner'?

All of Maxene's work is presented in keeping with her own personal vision, and for that reason the figures are not movable. They each have glass eyes, and are painted with acrylics and make-up. She uses mohair for the wigs, which she makes on a base and fits onto the head of the bigger dolls. With the dollhouse scale miniature dolls, she usually glues the hair directly on to the skull. When needed, she

simulates curls by first wrapping the air around a rod while it is still wet.

The clothing for each doll is an integral part of the whole scene. She uses old antique cottons where possible and dyes them to the colour that she wants. Like many other artists, Maxene haunts opportunity shops and antique stores looking for fabrics. The clothing on her dolls can either be stitched or glued. She will often glue the fabric into place in order to create a certain fold or draping effect. Maxene says it depends on which works best on the individual piece that she is working on at the time. She makes tiny buttons from fimo to complement the costume.

Maxene was born in Gisborne, New Zealand, but moved to Australia at the age of 20, with her husband Gary. Although making dolls for such a short time, Maxene has been working artistically since 1985 when she commenced working with clay. After learning how to throw pottery and make ceramics, she and Gary set up their own ceramic studio. At this time, Maxene also painted scenes using a combination of wax and fabric, creating a type of three-

dimensional image. She later discovered that she really enjoys sculpting figures directly in fimo, and this is now her preferred medium.

Maxene says that she tried working in porcelain, but that she didn't enjoy having to make allowances for undercuts while creating her figures. She found that she couldn't totally lose herself in the sculpture, if she had to keep coming back into her head to think about where the undercuts should be.

After completing her first body of work, Maxene sent photographs to various galleries in the United States, to gauge their reactions. She targeted those places that normally sell Artists dolls, and was thrilled that all of the gallery owners, sent back positive responses. When she was invited to send examples of her work for inclusion in an exhibition and sale at one of the Galleries, Maxene sent her entire stock of dolls that she had made - a total of nine months' work. To her horror, the entire shipment was damaged in transit. When they finally arrived into the gallery, the owner rang her to say that every piece had been destroyed and was beyond repair.

Even though the shipment had been insured, Maxene was devastated that her work had been lost. It was an experience that naturally enough she never wants to see repeated.

This prompted her decision to start producing limited edition dolls. With the help of Gary, she made silicone rubber moulds from six of her original sculptures. From these, Maxene has started casting miniature dolls in wax.

These dolls are beautifully made, and are painted with oils. They are dressed as fairies using simple fabrics and are utterly charming. Maxene is limiting these dolls to an edition of 120. However, she says she has lots of other wonderful ideas running around her head, and her dream is to push the casting of dolls in this way, into another dimension.

Meanwhile, she is also continuing with her one-of-a-kind creations.

Maxene's one-of-a-kind dolls range in price from A\$700 to A\$1500 depending on the amount of work involved. Her limited edition dolls realize between A\$95 and A\$145 each.

For more information on Maxene and her work, you can write to her at the following address. Please remember to include a stamped self addressed envelope.

Maxene Morganson 109 Beech Drive Suffolk Park NSW 2481 Australia

The Incomparable Artistry of E.J. Taylor

By Diane Hargreaves

E.J. Taylor is the consummate Doll Artist. He has an incredible amount of artistic talent, coupled with an irresistible blend of charm and niceness, and a wicked sense of humour. To me he conjures up visions of a more gracious era when the world was less hurried and people took the time to exchange pleasantries with each other. He is shy and unassuming, soft spoken and gentle, and has an aura of serenity about him, that I envy.

E.J. is one of the pioneers of Doll Art, as we know it today, in the Western World, and certainly one of the most talented. His Artist Dolls are indeed exquisite, and his subject matter diverse. He has created wonderfully realistic figures that display a depth of emotion and sensitivity that is seldom achieved by other Artists. From the depths of his imagination, came an entire community of elves that made up the Tiffany's Christmas Window Display. These have a magical quality about them, somehow blended with a poignant realism, that clutches at your heart. He has created clown figures from the Italian Commedia dell'Arte, and a whole range of anthropomorphic figures that are meticulously executed and exquisitely dressed. They are disarmingly believable, and you have to remind yourself that these fabulous creatures do not really exist. His work is both exciting and refreshingly different, and achieves a rare standard of excellence that reaches into another dimension.

All of E.J.'s figures are completely handmade and hand sewn, and display an infinite amount of fine detail. Each one is as unique as the next, and has its own definite personality. His style of dressing can combine the simplest of fabrics into the most interesting array of costuming ever seen.

E.J.'s skills have no doubt been honed in part by his diverse background and extensive design experience. He studied costume design at the Parsons School of Design in New York City - one of the top design schools in the United States, and his training was very thorough. It included, art history, costume design, fashion drawing, fashion illustration, anatomy and life drawing, colour theory, design, draping, tailoring, hand finishing and pattern drafting. All of these techniques are called upon in his dollmaking, which E.J. admits is his first love. His talent of course is apparent and uniquely his own.

After graduation, E.J.'s artistic flair was quickly recognised, and his work was in great demand. Early in his career, he was hired to design and build puppets, masks and special effects for a Broadway production by Stephen Sondheim and Hal Prince. More such work followed. He has designed dolls and puppets for Boris Aronsen and Mikhail Baryshnikov, and designed windows for Sak's of Fifth Avenue and Henri Bendel's. He has also designed the Tiffany's Windows in New York City on four separate occasions, in itself a remarkable achievement.

E.J. ceased making dolls for a period of about ten years, when he was immersed in other creative activities. During that time, he was certainly not idle.

He wrote and illustrated a whole series of children's books, that enjoyed great success and won him a whole new legion of fans. Not surprisingly, these are some of the most delightful books for younger children, that I have ever read. He also wrote a very detailed book on dollmaking in which he describes various dollmaking techniques. The step by step instructions, show how to make a paper doll, a stocking doll, a papier mache doll, a clay doll, a wax doll and two types of rag dolls. His book is still currently available and has proved to be a great asset to many aspiring doll artists.

E.J. was born and raised in the United States in Longview, Washington - a lumber milling town on the Columbia River. He lived on a farm, which meant a plentiful supply of natural resources were readily available to him. As a child he was always artistic, and forever making imaginative things. He recalls seeing his first puppet show when he was only seven years old and being totally mesmerised by the images before him. It left a lasting impression, and led to him making childish environments of his own, and acting out his fantasies with the small figures that he created. So were sown the seeds of a passion, which is still with him today, that finds an outlet in his dollmaking.

E.J. made his first doll when he was twelve, from a combination of quilting cotton and fabric scraps left over from his mother's sewing box. He used baling wire for the armature and shredded old nylon stockings for the wig. The doll was held together with elmer's glue, and painted with a mix of his mother's make up and water colours.

Over the years, E.J. has mastered many different mediums. He is currently creating dolls using a combination of paper clay and super sculpey, and produces about ten figures a year. He now lives in England, and his work is sold mostly by commission. Occasionally a piece becomes available, which is almost always snapped up immediately. It is easy to understand why. E.J. Taylor's work is in a realm of its own. He is widely regarded as one of the most talented Original Doll Artists in the Western World, and is one of the few whose work is unquestionably accepted as Fine Art.

For copies of his book, 'Dollmaking by E.J. Taylor' or more information E.J. may be contacted at the following address. A stamped self-addressed envelope or International reply coupon would be appreciated.

E.J. Taylor, 6 Layer Gardens, Acton W3 9PR London England. Fax # 44-1-81-992 4235

DOLL FORUM

Special Issue



MAY 1995 Vol.5

doll by E. J. Taylor
photograph by Colin Willoughby